

インドネシアにおける地域開発と地域科に関する研究(2)

中 矢 礼 美

(日本学術振興会特別研究員)

はじめに

前回の報告では、地域開発の視点から独立後5回改訂された教育課程(技術科の領域)を分析し、それらは地場産業との関連性を示さない、単なる知識や技術に終始するものであったこと、そのため地域開発を推進するための積極的な意思や態度を育成するには不十分なものであったことを指摘した¹⁾。それに対して1994年の教育課程改訂で基礎教育段階(小・中学校)に新設された地域科は、地域の文化を保持・発展する意識や態度の形成、地域愛の醸成、地域開発を志向する人材の育成を目的として、各教育文化省州事務所が地域の歴史や文化、地場産業の技術の内容とする点で、持続可能な地域開発を推進する人材育成の可能性が高いことを明らかにした。しかし地域の状況とニーズに関する調査結果に基づく科目設定やカリキュラム内容選択の経緯を示さなければ、教師は教育内容の重要性を認識せず、結局従来と変わりなくなる可能性があること、また各科目が相互に関連し合うように構成されなければ、教科内の一貫性は保たれず、地域科の目標を達成することが困難になるという課題があることも指摘した。

今回は、この地域科の中でも先に示した課題を克服し得ると考えられ、ユニークな科目である「観光」科に注目する。以下、まず観光開発をめぐる議論を踏まえてカリキュラム分析を行い、次いで教授学習過程の展開を記述・分析する。

1. インドネシアにおける観光開発と観光教育

観光開発は、地元住民さらには国民全体の所得向上や外貨獲得および雇用促進の効果が期待される地域開発の一つの手段である。インドネシアにおける観光開発は植民地時代にまでさかのぼり、1920年代には既にバリやジャワを中心に開発が進められていた。独立後の観光開発の進展は、スハルト政権下、1969年の第1次5ヶ年計画に始まり、いまや一次製品の加工に並ぶ地域開発政策の柱となっている²⁾。

この観光開発については、インドネシアに限らず、

環境が破壊される、伝統文化が消滅する³⁾、新植民地主義⁴⁾であるという否定的な見解があるが、一方で外貨獲得、雇用開発のみならず、新たに文化を生成したり、地域アイデンティティや自己アイデンティティを確立させる可能性を高めたり、住民参加型の開発をすることで「持続可能な」観光開発を行う可能性があるという肯定的な見解がある⁵⁾。またインドネシアの観光は、ナショナリズムの一形態として、国民形成という役割をも担っているという⁶⁾。これらの議論と前回指摘した地域科の課題(科目間の一貫性、将来の展望や学習内容の地域開発における有効性の提示など)を分析の視点として、「観光」科のカリキュラムの特色と課題を明らかにする。

ところで、インドネシアにおいて小・中学校において観光教育がなされるのは、地域科の「観光」科が初めてである⁷⁾。これまでは中等教育段階以上では、1983年の第4次5ヶ年計画において観光教育の推進の必要性が強調されたことでその充実化が進められ⁸⁾、現在は観光コースが設けられた職業系の高校(122校)や大学(55校)、観光教育訓練センター(28校)において、ホテル経営、装飾、ガイドなどの観光教育・訓練が行われている⁹⁾。

現時点で観光を地域科内の一つの科目としている州は、全27州のうちリアウ州、ジャンビ州、ジョグジャカルタ特別市、西カリマンタン州である¹⁰⁾。そのうち本発表では、西カリマンタン州の「観光」科を対象とする。

2. 西カリマンタン州における「観光」科

西カリマンタン州では、地域科に「アダットと伝統の学習」科、「地方の手工芸・技術」科、「地方の芸術」科、「農業手段・方策」科、「農耕産業」科、「観光」科を設定している。「観光」科は、「地域における観光産業の潜在能力について知り、理解し、観光産業の発展に積極的に参加する態度を育成する。また生徒が生活に必要な技能を修得できるようにする」ことを目標として、小学校5年から中学校1年まで、地域科の選択科目として週2時間設定されている。学習指導要領

では、「観光」科を設定した経緯についての説明はないが、農業関連科目以外の科目は文化の学習が直接、間接的に観光産業という地場産業の振興に有効な内容となっており、地域科の目標が効率よく達成される可能性を高めている。

では観光開発をめぐる議論をふまえて分析するとどのような特色や課題があるのだろうか。

環境破壊や政府主導型の開発問題や新植民地主義や内的植民地主義などに関する内容については、一切触れられていない。観光開発の重要性については、外貨獲得という国家の収入源にあることを初めに学習するようにして、強調している（領域2）。雇用の促進から見れば、土産品の作り方、ラッピングの方法、売り方などを内容としており、実践的で、市場で役立つ知識と技能を与えようとしている点で評価できる（領域8）。文化に関連する学習内容については、既にガイドブックに載せられている観光名所を羅列するのではなく、「観光を支える」「観光のおもしろさに役立つ」「観光資源となりうる」文化儀礼や歴史や遺跡を説明できることが目指され、観光のまなざしを意識して文化の掘り起こしをしようとしており、地域アイデンティティや自己アイデンティティを確立させる可能性があると考えられる（領域5）。そこでは伝統文化が観光によって消滅するというような語り方はされていない。観光資源として取り上げられているものは、西カリマンタン州の多数派民族であるムラユ族とダヤク族の二つの民族文化、歴史および遺跡である。ムラユ族であってもダヤク族の文化を、ダヤク族であってもムラユ族の文化を、そして移民もその二つの文化を観光資源として学び、伝える側になることを目指す点で異文化に対する知覚や経験の仕方を変え、従来の異文化理解の問題を克服する可能性がでてくると考える。持続可能な観光開発の可能性という視点からみれば、「積極的に参加する態度を育成する」ことを目的としているが、「主体的参加」を認めているわけではなく、行政による計画を理解させ、積極的に従うことを促しているにすぎないといえる。国民形成については、まず「政府の諸努力を述べること」を目指し、インドネシアの7つの観光スローガンを内容としたり（領域2）、観光客に対して親切で丁寧な交流方法を学ぶ内容を多くしていることから（領域7）、政府の努力や方針を理解し、観光客を気持ちよくもてなす「よき国民」の形成が目指されていることが明白である。また「観光の種類を知る」での例には（領域3）「スタディツアー」は入っていない。インドネシアは観光において「美しいインドネシア」を演出することを目指しているため、「一般の観光では観ることのできない社会の現実の姿を観

ようとする」「多くの場合、社会・開発の〈負の側面〉をみる」スタディツアーは取り上げられないだろう。

以上のように、西カリマンタン州の「観光」科は、雇用の促進に貢献する可能性が高く、地域や自己アイデンティティの確立に貢献し、自他の民族に関わりなく州内の民族文化を観光資源として学び、自ら伝える側になることを学ばせることで、異文化理解を促進する可能性を高めると評価できる。しかし観光開発による悪影響、問題については一切触れず、政府による観光開発政策を無批判に支持、支援する「よき国民」の形成を目指すという特色を持つため、主体的な参加による「持続可能な」観光開発の推進者の育成には課題を残しているといえよう。

<西カリマンタン州「観光」科>¹⁾ (<>は目標)

<領域1>忙しい合間に考えや精神をリフレッシュするため、他の土地や国を知り、自然の美しさや文化を知る人間の活動の一つであるという観光の意味、国家の収入源の一つであるという観光の意味。

小5：<観光活動の意味とその目的について理解する。>観光の意味と観光活動。観光活動の目的。専門用語の理解。諸外国の観光、国内観光の意味。重要な意味を持つ、国家の収入源の一つである観光。

<領域2>インドネシアの観光シンボルの目標と意図についての理解、七つのスローガンについて。

小5：<観光産業に対する政府の諸努力を述べるられる。>インドネシア観光年の実施。赤道線フェスティバル。七つのスローガン（秩序、安全、清潔、涼しさ、美しさ、優しさ、思いで）とその意図。

<領域3>観光活動の種類、文化観光、自然観光、バックパッカー、遺跡巡り観光、買い物観光などについて。西カリマンタンにおける観光諸地域について。

小5：<州の観光名物を説明できる。>旧跡巡り、バックパッカー、お買い物ツアーなどの観光の種類。州都からそれらの場所への距離と行く方法。観光地にある施設・娯楽。

中1：<地域の観光関連知識を持つ。>文化観光（遺跡、儀礼、伝統的な村の生活）。バックパッカー（探検、急流下り）。自然観光（海岸の美しさ、釣り、潜水）。お買い物ツアー（店、伝統的な市場、工芸品製作所）。

<領域4>観光を支える宿泊所、観光案内人、レストランや食事場所について。

中1：<観光を支える施設・設備を使用できる。>事務所、エージェント、郵便局、銀行、宿泊施設。移動手段（陸路、水路、空路の乗り場や料金）。飲食店（レストラン、屋台）。方向指示（標識）。観光地域の地図。

<領域5>観光を支える文化儀礼，地域にある歴史的な遺跡や王族の歴史について。

小5：<観光対象となるアダットや伝統を説明できる。>畑仕事の開始や収穫の儀礼，漁の儀式，結婚式，割礼。<見聞した伝統儀礼，歴史的な遺跡や建物を説明できる。>イスラム教の伝来前・後と独立後の建物や遺跡。歴史的，伝統的，機能的，高い文化的価値を持つロング・ハウス，移動家屋，ムスジッド，教会，仏教寺院。

中2：<観光に必須の娯楽である芸術的行事における様々な舞踊について説明できる。>ムラユ族の踊り，ダヤク族の踊り（アダット的な踊り，交流の踊り）。使用される楽器や服装。<観光客を楽しませる地域の伝統音楽を説明できる。>ダヤク族の伝統的な音楽。<伝統的な楽器の一つを習得する。>

<領域6>地域における観光物を宣伝する方法。

小5：<観光地を示す標識，行き方を説明できる。>観光地域の標識，宿泊所，食堂，病院，遺跡，博物館を理解。<観光地の標識を書ける。>標識の色や大きさ，絵の特徴，観光地域，博物館，遺跡，宿泊施設・ホテル，飲食店。<距離や観光地の名前を簡単な素材で作成できる。>作り方を理解する。標識をつける方法を知る。<観光名所の地図を作成できる。>距離が分かる地図の作成法。正しく測り，地図を作製する。小6：<観光客の興味をひく情報資源を説明できる。>書かれた情報，地図と絵，標識。<情報資料を作成できる。>簡単な方向を示す看板，ポスター・絵，パンフレットの作り方。

中1：<観光を説明するパンフレット・ポスターを作成できる。>ポスター，許可証，パンフレットの絵や文字を作る方法。<絵や文字のデザインの作り方を習得する。>

<領域7>会話のための外国語。

小6：<観光客を迎える外国語を使用でき，簡単な会話ができる。>基本的な知識（英語）。日常用語や専門用語。簡単な会話練習。専門用語・語彙を語彙を増やす。質問の受け答え練習。<外国人を迎え，交流する方法を説明できる>交流方法の知識。してはいけないこと，してもよい事についての知識。

中1：<観光を助け，情報を与える方法を説明できる。>会話に必要な用語や言葉を習得する。情報を与えるための質問と答えの方法を習得する。当該地域についての知識。

<領域8>土産品作りの基本。

小6：<装飾の特徴的なシンボルや意味を説明できる。>家の道具，盾，縁の装飾の種類。花，草，文字の装飾。<土産品の装飾方法を説明できる。>カギ吊し，

盾と矛，ビーズ装飾。<地域の特徴的な装飾で飾られた土産品を作成できる。>カギ吊し，盾と矛などの彫刻。帽子を飾るベール作り。ビーズ刺繍。プリント。中1：<布の染め方，プリント方法を習得する。>プリントの基本的な絵の作り方。基本的な絵，プリントの絵の作り方。<うまく土産を売る方法を説明できる。>工芸品を仕上げる方法（磨く，色を塗る，選別）。ラッピング方法。価格の知識。業者，土産店を通して売る方法。地域の材料で土産品をつくる練習。

4. 西カリマンタン州ポンティアナック国立第3中学校（仮名）における「観光」科の授業実践

カリキュラムはあくまで大まかな指針であり，まだ「観光」科の教科書が発行されていないため，学習内容が学校でどのように伝達されるのかは，地域，学校，生徒の状況，教師の教育意図などに大きく左右される。そこでポンティアナック市の中学校における「観光」科の授業実践を記述，分析する¹²⁾。

(1) ポンティアナック市と学校の状況

ポンティアナック市は州都であり，人口39万9446人（1990年），行政，商業，教育の中心として都市化している¹³⁾。民族構成は多様で宗教構成比から推測すると，イスラム教徒（主にムラユ人，ジャワ人ブギス人）63.00%，キリスト教徒（ダヤク人，華人）6.60%，ヒンドゥー教徒（バリ人）0.17%，仏教徒（華人）5.59%，コンフューチー（華人）24.63%である。ダヤク人，ムラユ人以外は移民である。ジャワ，シンガポール，マレーシア・サラワク州間の人口移動が激しく，その影響で社会生活の価値や習慣に対する態度や考え方は大きく変化しつつある¹⁴⁾。また1994年9月の「赤道直下の文化フェスティバル」の開催にあたって観光開発が進められ，博物館なども増改築されるなど，力が入れられてきた。

学校は，町の中心まで歩いて10分，ビジネスホテルと住宅街に囲まれる1学年8クラスの大規模校である。教師はムラユ人が大半を占め，ダヤク人，ジャワ人も数名いる。生徒も大半がムラユ人だが，ダヤク人，華人，ジャワ人が1クラスに2，3人づついる。地域科としては，「地域の技術」科，「アダットと伝統の学習」科，「観光」科を実施している。

(2) 1年B組の「観光」科（1995年12月5日）

教師の属性・教育意図：ムラユ人，イスラム教徒，40歳前後の女性教師。教科書も詳細な指導書もないことに不満を言いつつ，熱心に教材開発に取り組み，課外

活動として博物館で学習させるなどする。

生徒：ムラユ人が大半を占める（混血のダヤク人1人、華人1人を含む）。

教科書・教材：各州の観光名所ガイドブックと西カリマンタン州観光局発行によるパンフレット。

授業時のねらい・内容：観光について理解する。

教授学習過程：

教師：はい、今日はまず観光について理解することから始めましょうね。観光とは、観光名物を楽しむためにしばらくの間、観光地を旅することです。（もう一度繰り返す）そして、観光客とは、観光地にしばらくいて、観光名物を楽しんでいる人のことをいいます。

はい、観光客とは？（生徒に反復させようとする）

生徒：しばらくの間、観光地を旅して、観光名物を楽しむ人のことです。（口々に言う）

<中略：観光開発の許可制度、出先機関の場所について問答をする。>

教師：はい、はい、ではこの観光とは、一体何に基づいて行われるのかしら？①

生徒：はい、先生。私、ね、せんせーい。（女生徒が自信たっぷりて先生に指名をせがむ）

教師：ダニー。

生徒：（指名されて）利益、公正で公平な家族主義、です。ふう。（ちゃんと覚えてひと安心）②

教師：はい、そうよ。利益のために行い、しかもそれは公正で公平な家族主義に基づいて行われるのよね。

（まるで呪文のようにフレーズを言う）③はい、それから観光に行く人はもちろん目的があって、行くのよね。旅行を楽しむこと、他には？

生徒：はい、先生！先生！

教師：（聞いておきながら、生徒には言わせないで）

そう、違う地域の文化を見に行くのよね。他には？

生徒：はい先生！（教師が先に行ってしまうように早口で）会議やセミナーに出席するついでに観光もする！

<中略：インドネシア各地の観光名物となっている踊りについてしばらく、話が続く。>

教師：そう、それから観光の普及について。政府は観光資源、観光地を開発するけど、目的があるわね。その目的は何？④

生徒：（首をかしげ）国家の収入をあげる。文化が残っていることを知らせる。（何人か真剣な面持ちで答える）⑤

教師：（満足げに）そうね。第一に自分たちの文化が残っていることを知らせるためね。地域に残っている観光資源を宣伝したり、それを高めるためね。⑥そして、国家の生産力、収入を助けるためよね。⑦そ

して、私たちは他の国で有名になるわねー。違う国の国民同士が友達になるわね。いろいろな国から、私たちの国にやってくるわね。きっと友達になるわね、国民と？⑧

生徒：国民。⑨

教師：そうよ。それから？⑩

生徒：先生！先生！

教師：（せがむ生徒の声を無視して、ほほえみながら）国家がより平和で繁栄するの。⑪

生徒：（あーあ、言われちゃった、という感じがっかりする）

教師：ね。国民と国民が友達になり、国家の生産力を高め、国の貨幣価値があがるわね。⑫

生徒：他にもあります。先生。

教師：（うなずいて）仕事をする場所を広げるわね。観光地を案内したり、何か手作りのお土産品が作れたら、観光者に買ってもらえるかもね。⑬

はい、では今度は観光の魅力についてね。それは2つに分けられるわ。第一にそれは神の創造物。そして人間の創造物よ。神の創造物は、山、川、美しい海岸。人間の創造物は、歴史が残した遺跡、博物館、モニュメント、アダットの儀式、芸術。では踊りは？

生徒：へへへー。ジャイポンガンー。（<西ジャワ州の踊り>男子生徒、くねくねして踊ってみせる。笑い）

教師：（げげんそうな顔で）西カリマンタンのダヤク族の踊りは？あなたたちが知っているのは何？

生徒：先生、はい。（とりあえず、教師を呼んでみせるが自信なさげ）

教師：クンバン・グムライ、シラン、ドンダン、それからアンボヨ踊りはいつ行われるの？

生徒：収穫期です。

教師：そう、この踊りは収穫を神に感謝して捧げる踊り。そしてまたよりたくさんの収穫が得られるようにお祈りする意味もあるのよ。踊りは時には薬の代わりとしてまじない師によって踊られるの、村人も一緒になってね。（少レトーンを落として）でもね、これはずっと遠い地方のことだし、きっと医者ももういるから少ないわよね。でもまだ、まだ残っているわ。⑭

生徒：（既に知っているという感じで大きな反応はない）

教師：じゃあ次は衣装についてね。（伝統的な衣装を着たダヤクの挿し絵を見せる）

生徒：（生徒たちは身を乗り出して見入るが、しばらくして遠いのと小さすぎるのであきらめる）

教師：袖はね、こんなに、こんなに短い。丈もこんなに、こんなに短い。でも今はイスラムの影響を受けて、彼らも気がついて丈は長くなってきたわ。⑮この首飾りわね、豚の歯よ。安いわよねー。⑯ ダヤ

ク族がしているのは？タ？（答えを促す。）

生徒：タトゥー（<入れ墨>）

教師：そう、タトゥーをしているのは？

生徒：ダヤーク！

教師：そう、彼らは羽をつけてるわね。私たちが真似して頭にびよこつとつけたりしたらきつと怒るに違いないわ。だって羽をつけるのは、結婚している証拠なんだから。（怖そうに言う）⑰ そうそう、顔に赤い線をいれるのは？⑱

生徒：インディアン！（はしゃぎながら言い、急に真面目な顔になって、インディアンのつもりになって人差し指を額にあて、すーと線を鼻に向けて書く真似をする）⑲

教師：そう、ここに赤い線を引くのよね。（と言って真似をする）⑳

教師：さあ、ダヤークは西カリマンタンの先住民族だけど、私たちムラユ人も多いのだから、次はムラユの踊りについても勉強しましょう。何かあるかしら？

生徒：レバナとか。

教師：そうね。レバナ、ラダグダ、デティック、タンダック・サンバル。タンダック・サンバルって何の踊り？ アンドリ。（指名する）

生徒：はい、えっと。

教師：パ？

生徒：あ、パンガンル。

教師：そうね。人と一緒に踊る点では、ジャワのジャイポンガンと似ているわね。㉑ じゃあ、クンバン・グムライってどういうの？（あててほしいとせがむ生徒を制止ながら）歓迎の踊りよね。優美で上品な踊りよね。㉒

<しばらくムラユの踊りを上げ、似たような踊りがあれば他州の踊りやダヤークの踊りの例を上げるという話が続き、授業の復習を簡単にして終わる。>㉓

この授業では、観光の重要性について、外貨獲得や雇用の拡大だけでなく（④⑦：下線番号を示す。以下同じ。）、第一に自分たちの文化を人々に伝達できること（⑤⑥）、さらに観光を通して他国の人々との友情を深めることができ、それが国家の平和や繁栄につながると伝え（⑧⑨⑩⑪）、カリキュラムに示されているより広く観光の意義を提示している。また観光産業を通して自民族文化を伝達することを誇りに思うことを促すなど、地域や自己のアイデンティティの確立に貢献していると思われる。しかし政府主導型の観光開発についてはやはり肯定的に捉え、実際の観光開発について議論することなく「公正で公平な家族主義」といううわべだけの理解に終始している（①②③）。教師の

社会問題に対する関心が低ければ、カリキュラムに書かれていない限り、観光開発の問題が授業で学習される可能性は低いと思われる。観光資源として取り上げている文化は、カリキュラム上はムラユ文化とダヤーク文化だけであるが、インドネシア各地の有名な踊りも例にあげて類似点を説明するなどの工夫をして、自分たちの文化の語り方を模索していると思われる（㉑㉒）。またダヤーク文化とムラユ文化の提示の仕方も興味深い。カリキュラムでは、二つは並列されているだけであるが、教師は西カリマンタンの特徴的な文化はダヤーク文化であることを強調している。そしてムラユの踊りについては「優雅で上品な」という形容詞を用いているのに対し（㉑）、ダヤーク族やダヤーク文化に対しては、豚の歯を使った装飾品を安と皮肉っぽく言い（㉒）、衣装は丈が短い、ムラユの影響を受けて「気づきはじめ」、長くなってきたと説明、強調するなど（㉓）、「後れ」ている「評価できない」ことを暗に示したり、踊りを謎めいたもののように伝え（㉔）、異国のインディアンになぞらえるなど（㉕㉖）、全体的にダヤーク族に対するイメージとして「未開」「謎」「エキゾチック」なイメージを共有していく過程が目される（㉗㉘）。このような偏ったイメージの強調は、教師はムラユ人でイスラム教徒であり、生徒にダヤーク人が殆どクラスにいないため行われた可能性が高い。このようなことは他の授業においても見られるものであり、教師や親たちの話の中でも聞かれることである。このイメージをダヤーク人自身がどのように受け止め、自らをそのようなイメージでアピールするつもりがあるのかが問題となるが、その点については明らかにできなかった。

このように一つの授業例の分析ではあるが、教師の観光に対する認識の仕方によってカリキュラムに書かれなくとも、自分たちの文化を表現する場として観光を重要視したり、自分たちの文化をどのようなものと表現するかを模索したりと評価できる部分がある一方で、社会問題に対する関心の低さからカリキュラムに書かれていない批判的な視点から捉えることができなかつたり、他民族に対して偏ったイメージを強調することもあることが分かった。

おわりに

このように、西カリマンタン州の「観光」科は、「観光」科を設定した経緯についての説明はなされていないが、農業関連科目以外の科目は文化の学習が直接、間接的に観光産業という地場産業の振興に有効な内容となっており、地域科の目標が効率よく達成される可能性を高めている。観光開発をめぐる議論を踏まえて分析すると、雇用の促進に貢献する可能性が高く、

地域や自己アイデンティティの確立に貢献し、州内の他民族文化を理解し、有効な資源とみなす可能性を高めると評価できる。しかし観光開発による悪影響、問題については一切触れず、政府による観光開発政策を無批判に支持、支援する「よき国民」の形成を目指すため、主体的な参加による「持続可能な」観光開発の推進者の育成には課題を残しているといえよう。

また授業実践の分析では、教師が自分たちの文化を表現する場として観光の意義を見だして伝えたり、自分たちの文化をどのように表現するかを模索したりと評価できる部分もあったが、住民参加型の観光開発を促す内容がカリキュラム同様授業でも触れられていないこと、他民族に対して特定の（おそらく負の）イメージを強調しすぎる傾向があることが明らかになった。よりよい観光教育を行うために、観光開発をめぐる議論を十分ふまえたカリキュラム開発と教師教育が必要であると考えられる。

現在インドネシアでは政治改革とともに、教育の見直しも進められている。従来家族主義の捉え方、開発問題に対する批判も高まり、カリキュラムも大きく改善されようとしている。「観光」科のみならず地域科が当初の目標を達成すべく、どのようにカリキュラムを改善していくか、教師たちはどのように民主化を進めていくことができるのか、今後の展開が注目される。

注

- 1) 拙稿「インドネシアにおける地域開発と地域科に関する研究(1)」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第44回巻 第1部、1998年、433～438頁。
- 2) 尾村敬二、モハメド・アンシャド・アンワール(編)『インドネシアにおける地方開発』1994年、43頁。
1985年インドネシアを訪れた外国人観光客数は約75万人（うち約9万は日本人観光客）、観光収入は5億ドル強、外貨収入源の第7位に位置する（『インドネシアの事典』、122頁）。1985年から1992年までの観光産業セクターの年間平均伸び率は29.90%である（Kompas紙、1996年10月2日）。
- 3) 純粋な伝統文化があることを前提に、観光開発によって文化が商品化、切り売りされ、その結果現地の人々が文化的、社会的に損失を被るという見解。
- 4) 新植民地主義（先進国による途上国の開発）、内的植民地主義（国内の中央による周辺の開発）として非難されることが多く、住民強制退去や住民の立ち入れないリゾート問題に集約されている。
- 5) 山下晋司編『観光人類学』新曜社、1996年、66-73頁。環境や文化・社会への配慮、規模の縮小あるいは適性規模志向、基本的な必要性や平等性の重視、住民の主体的参加は、「自然・文化の多様性をつぶして画一的なリゾート」開発でなく、「元来の多様性を生かす」「持続可能な」観光開発につながるという。
- 6) 山下晋司「美しいインドネシア」宮崎恒二山下晋司、伊藤真(編)『インドネシア』河出書房新社、1993。
土屋健治「ナショナリズム」土屋健治編『東南アジアの思想』弘文堂、1991、110頁。観光用に作り直されたバリの伝統文化は、インドネシアの国民文化を構成する地域文化の一つとして、またインドネシアの文化イメージを世界に伝える重要な媒体として機能している。1991年の「インドネシア観光年」においては、様々なイベントが各地で行われることによって「美しいインドネシア」が演出された。観光用の「イベント・カレンダー」に書き込まれることによって、地域文化・民族文化はインドネシアという国民国家の一部であることが確認されるという。
- 7) 教育文化省編纂の小・中学校の社会科の教科書では、観光産業についてほとんど触れられない。
- 8) 「観光を発展させるために一貫した政策を基盤として諸規則、諸方針を定め、特に宣伝、観光教育、設備の準備及びサービスの質を高める必要がある」(Aziz Armicun (ed.), *EMPAT GBHN 1973・1978・1983・1988*, BUMI AKSARA, 1990, p.207.)。
- 9) 第6次5ヶ年計画では、90万人観光産業部門で必要であり、年間上記の機関から10万6千人が卒業したとしても、期間中には53万人しか卒業生がおらず、なお37万人が足りない予想されており、観光庁人材開発局長は訓練・教育能力、奨学金、長期的開発の向上、教育・訓練施設やプログラムの向上、権限（決定権）基準の社会化、私企業との共同事業機会の向上を図るべきとしている。(Suara Pembaruan Daily 紙、1997年7月22日)
- 10) インドネシアで最も有名な観光地であるバリ州では、「観光」科は設けられておらず、「英語」科や「地域芸術と社会文化」科が選択科目として設定されている。
- 11) Kantor Wilayah Departmen Pendidikan dan Kebudayaan Propinsi Kalimantan Barat, Kurikulum Muatan Lokal Pendidikan Dasar, Pontianak, 1993. 筆者抄訳。
- 12) 調査は、1995年11月末から1996年1月までの間に、約1ヵ月半行った。
- 13) Proyek Penelitian Pengkajian dan Pembinaan Nilai-Nilai Budaya Daerah Kalimantan Barat Tahun 1992/1993, Peran Pendidikan dalam Pembinaan Kebudayaan Nasional, 1993, pp.9-15.
- 14) Ibid, p. 19.